

はじめに

炭鉱から港へ。1925（大正14）年に春採～知人で開業した「釧路臨港鉄道」。入舟町～城山の11.4kmまで路線を延長し、太平洋炭砒の石炭輸送と、釧路港に出入りするさまざまな貨物の輸送に活躍しました。

1960年代中ごろから、「シャトルトレイン方式」に代表される運行方法の近代化を強力に推し進め、太平洋炭砒の年産250万トン体制を支えました。それは我が国の鉄道史のなかでも特筆すべきことといえます。また1963（昭和38）年までは旅客営業も行っており、そのディーゼルカーからの車窓をいまでも記憶している方もおられると思います。

1979（昭和54）年、釧路臨港鉄道(株)は太平洋石炭販売輸送(株)に合併となりますが、その後も当初の略称「臨鉄」、また最近「石炭列車」などと呼ばれ、市民にも親しまれ、また鉄道ファンにも注目される存在でした。

2002（平成14）年の太平洋炭砒から釧路コールマインへ縮小移行後も、鉄道での石炭輸送は継続されます。しかし、炭鉱の近接地に新たに石炭火力発電所が建設され、釧路コールマインの石炭を釧路港から輸送することがなくなることから、2019（令和31）年3月末をもって石炭輸送は終了、そして6月末をもって鉄道は廃止となりました。

廃止後、博物館ではその歴史を継承すべく、太平洋石炭販売輸送(株)（現 新太平洋商事(株)）をはじめ、釧路港運作業(株)、釧路臨港鉄道の会など、みなさまからの多大なるご理解・ご協力のもと、資料の収集を行いました。これらの資料は、整理・調査を進めるとともに、2023（令和5）年1～5月に開催した企画展「炭鉱と、港と～釧路臨港鉄道・太平洋石炭販売輸送臨港線の軌跡～」で展示を行いました。本書は同展をもとに、写真・図面・文書資料を中心に収めたものです。

95年間、地域や産業の発展に寄与した「臨鉄」「石炭列車」の歴史を感じていただければと思います。

2024（令和6）年 釧路市立博物館

もくじ	石炭列車 日常の風景 …………… 61
カラー写真でふりかえる臨鉄・石炭列車…………… 1	車両主要諸元表 情野裕良 …………… 70
臨鉄のきっぷ…………… 15	[図表など]
釧路臨港鉄道・太平洋石炭販売輸送臨港線のあらまし	車両竣工図表…………… 71
石川孝織 …………… 17	形式図…………… 87
輸送量（1925～2018年）…………… 24	パンフレット…………… 98
SLからシャトル・トレインへ	駅構内略図……………103
1950～70年ころの臨港鉄道 細野哲男…………… 25	線路図・構内平面図……………105
釧路臨港鉄道向け電気連結器の顛末記 高井薫平… 31	建物等設計図……………114
[写真]	時刻表・運行図表……………123
臨鉄の車両たち…………… 33	制御盤面図……………132
開業のころ…………… 43	輸送量・その他……………133
絵はがき資料から…………… 44	社内紙「臨鉄」より……………142
戦後から高度経済成長へ…………… 47	市販時刻表から……………152
進む近代化…………… 56	年表……………153
雪と災害とのたたかい…………… 59	

【凡 例】

本書は、2022（令和4）年度 釧路市立博物館企画展「炭鉱と、港と～釧路臨港鉄道・太平洋石炭販売輸送臨港線の軌跡～」(2023.1.28～5.7)の記録集であるが、展示対象としなかった資料からも選択・収録し、関係者による証言などを加え制作した。

展示構成・冊子化は当館学芸員である石川孝織が担当した。資料収集・整理・調査、ならびに展示・行事運営にご協力いただいた皆様に、この場を借りて御礼申し上げる。

掲載資料のうち所蔵者・撮影者（写真）が示されていないものは、当館が所蔵するものである。年代の表記は「西暦（和暦）」を基本としたが、写真などでは和暦を省略した。1980年以降の資料については、個人情報保護の観点から印影を削除している。